少年が非行を行う原因とその対策について

井上　芽依

1　はじめに
2　少年非行とその背景
3　非行少年とその背景
4　少年非行を減らすために
5　おわりに

1　はじめに

近年の少年非行の背景や原因には、少年自身の性格や素質、少年を取り巻く社会的要因が考えられている。昨年度の自身の論文では、非行少年は家庭環境や学校など、狭いコミュニティの中で生活していることが原因となり、少年自身が周囲の影響を受けやすく、非行に走ってしまうと考えられるため、矯正教育による更生の余地が十分にあると結論付けた。

これを踏まえて、具体的にどのような家庭環境や学校生活などが非行少年を生み出す原因を作っているのか。そして、少年非行の原因として考えられる少年自身も性格や素質はどのようなものが考えられるのかについて、犯罪白書や実際の少年事件を元に検討したい。

2　少年非行とその背景

実際に、少年の非行にはどのような背景があるのであろうか。昭和 54 年の警察白書[1]によると、少年の非行の背景として「家庭内の問題」が 55.0%と過半数を占めており、次いで、「学校の問題」が 15.1%、「その他の問題」が 12.4%となっている。また、昭和 53 年 11 月に実施された総理府の世論調査により少年非行の原因をみると、「家庭環境、家庭のしつけ」が 67%と最も多く、次いで「社会環境」が 29%、「学校、教育のあり方」が 13%といった順になっており、これらを踏まえると、少年を非行に追いやる最も重要な要因は家庭にあり、また非行を防止する最も重要な原因もまた家庭にあるということができる。

では少年の非行の原因としては、少年の家庭環境の影響が大きく考えられるがその原因はどのようなものが考えられるのだろうか。昭和 54 年の警察白書によれば、刑法犯少年の両親の状況としては、非行少年の父母の欠損率について一般少年と比較したところ、父欠損率

[1] 昭和 54 年 警察白書（https://www.npa.go.jp/hakusyo/s54/s540200.html）

は一般少年が 5.0%であるのに対して非行少年の場合は 12.4%であり、母欠損率は一般少年が 1.8%であるのに対して非行少年では 7.8%である。よって、非行化の背景として親の欠損は依然として軽視できないことがうかがえる。離別の内容の大部分としては離婚によるものであると考えられ、離婚家庭における少年の健全な育成には留意が必要であろう。

実際に家庭での親のどのような行動が非行に繋がってしまうのだろうか。平成 17 年版犯罪白書[2]では、保護者調査における子育ての問題の有無に関する父母別の比較を行っている。この調査によると、子育てに関し、「子どもに口うるさかった」、「夫婦の子育ての方針が一致していなかった」、「子どもの好きなようにさせていた」との項目に対し、「そう思う」とする比率が高かった。また、児童虐待との関連のある項目である、「子どもに感情的に手を上げていた」に関して「そう思う」と回答した比率も父母ともに 40%を超えていた。これらを踏まえると、過干渉や放任、児童虐待などが考えられ、それらの反発として少年が非行にはしってしまう可能性がうかがえる。

少年の非行の背景として家庭内の問題に次いで学校の問題が考えられると前述したが、学校でのどのような背景に非行の原因が隠されているのだろうか。少年は年齢が上がるごとに生活の中心が次第に家庭から学校に移行していくため、少年にとって大きな人格形成に影響を与える場となる。しかし昭和 57 年警察白書の、少年が学校を楽しいと思う理由は、一般少年、非行少年とも「友達がいるから」が圧倒的に多く、これに対し「良い先生がいるから」「授業が面白いから」は特に非行少年は極めて少なかった。この調査から、少年が非行を行ってしまう原因として、つるんでいる友人から影響している可能性があるとも考えられる。

昭和 57 年の警察白書[3]の、親しい友人のタイプを調査した結果によると、男子については、一般少年は「読書が好きな人」、「スポーツをするのが好きな人」等が多く、非行少年は「人目を引くような服装をしている人」、「たばこを吸っている人」、「自転車、オートバイが好きな人」、「夜遊びをする人」等が多い。また女子については、一般少年は、「読書が好きな人」、「スポーツをするのが好きな人」、「人生、悩みについて話し合える人」等が多く、非行少年は「夜遊びをする人」、「人目を引くような服装をしている人」等が多い。このように、非行少年は、友人のなかに問題のある行為をする者が多いということが分かる。

また同じく昭和 57 年の非行を及ぼす友人の影響を分析すると、「友人と一緒なのでやった。一人ではしない」といった群集心理の影響と、「友人がうまくやったのを見聞きした。手口を教えられた」という非行の学修の影響が極めて強く、また「仲間の手前しないわけにはいかなかった」という集団等の圧力の影響も強くうかがえる。また非行時の状況を見ると、「みんなでなんとなく」が多く、半数以上を占めている。このように、非行の多くの場合は友人関係が非行を行う直接のきっかけとなっていることが分かる。

---

[2] 平成 17 年版 犯罪白書（https://hakusyo1.moj.go.jp/jp/51/nfm/n_51_2_4_3_1_2.html）

[3] 昭和 57 年 警察白書（https://www.npa.go.jp/hakusyo/s57/s570200.html）

3　非行少年とその個性

ここまで少年が非行を行う原因として、家庭環境や学校など少年の周囲の環境について触れてきたが、少年自身の性格や個性は非行にどのように影響するのだろうか。

実際に起こった少年事件を例に取り上げると、平成 10 年の「栃木女性教師刺殺事件」では、当時 13 歳だった少年は教師に遅刻を注意されたことに対してカッとなり、持っていたナイフで刺し殺した事件である。この事件での少年は、当時成績優秀で生活態度に何ら問題も無く、周りからも「よい子」であったと評価されている。

また別の事件である、「豊川市主婦殺人事件」は、豊川市の住宅で妻が金槌で殴打され死亡した事件であるが、当時 17 歳だった少年は学校では明るく活発な少年であり、家庭環境にも何ら問題が無かったとされているが、少年は犯行動機として「人を殺してみたかった」と殺人に対して興味を示しており、犯行時少年はアスペルガー症候群であったのではないかとされている。これらを踏まえても、少年の周囲の環境以外にも少年のもつ興味や障がいの有無、性格等も非行の原因として考えられることがうかがえる。

また、発達障害や知的障害のある子どもは、成長するなかでいじめや虐待などの被害に遭いやすく、それが原因で非行や犯罪にはしってしまうことがあるといわれている。科学技術振興機構の「非行少年と一般少年における被害経験の比較」のデータによると、非行少年の方がネグレクトや虐待、いじめや犯罪被害の経験が明らかに多く、怒りの感情も強いことから、虐待などの被害が非行に影響することも分かっている。

4　少年非行を減らすために

少年非行を減らすためには、実際にどのような取り組みを行うべきか。特に発達障害のある少年に関しては、少年が犯罪を犯した際に戻るための受け皿が乏しく、再犯をくり返す事例も多くみられている。

そこで、科学技術振興機構[4]では各種相談機関や愛知県弁護士会の協力を得て非行少年とその家族のための相談窓口を開き、相談内容に合わせた支援活動や支援ニーズの聞き取りを行った。家族や児童自立支援施設などの指導員からは、障がいの影響で少年が感情のコントロール方法や社会のルールなどを正しく身につけられていないなどの声が寄せられ、少年支援が不十分な現状が明らかになった。これらを踏まえ、再犯防止を支援するプログラムを開発し、ロールプレイングを行い、振り返りによって学習を定着させ、正しいやり方を身に付けてもらうものである。このプログラムを実施したところ、少年の自尊感情や人と関わる力、感情のコントロール力などがアップしたことが分かった。その他にも、警察では家出

[4] 科学技術振興機構（https://www.jst.go.jp/ristex/anzen-kodomo/pj_tujii/index.html）

少年の保護を行ったり、少年補導員がボランティアとして活躍したり等非行少年を減らすための取り組みがされている。

5　おわりに

少年非行の原因としては、伝統的に、少年自身の性質、欠損家庭のような家庭環境の影響が大きく指摘される。近年ではこの状況から分析し、知的障害を持った少年の再犯防止支援や、家出や不良行為の防止を目的とした警察の取り組みが行われている。しかし非行の最も大きな原因として考えられるものが家庭環境であり、家庭での取り組みや健全な育成を行うことが少年の非行防止に最も大きく影響すると考える。各家庭での教育や子育ての見直しや、取り組みが今後必要になってくるのではないかと考える。